

海外交流 ～さくらサイエンス参加者との熱い10日間～



海外交流

寺井 智之*, 野尻 郁子**, 田中 玲子***, 藤田 清士****, 田中 敏宏*****

Interchange with overseas people
～We deepened interchange with the overseas people who participated
in plan named "SAKURA-SCIENCE" eagerly for ten days～

Key Words : SAKURA-SCIENCE, Interchange, JST

1. はじめに

2014年9月8日から9月18日まで、独立行政法人科学技術振興機構(JST)が主催する「さくらサイエンスプラン」による事業で、インドネシア(バンドン工科大学、ジェンデルラ・ソエディルマン大学、ハサヌディン大学)、ベトナム(ホーチミン市工科大学、ハノイ工科大学)、ミャンマー(ミャンマー海事大学)、フィリピン(デ・ラ・サール大学)より合計10名の学生を招聘した。

当プログラムは本学CARENプロジェクト(アジア人材育成のための領域横断国際研究教育拠点形成事業)および工学研究科国際交流推進センターの教職員が中心に運営した。

参加者の日本滞在期間は1週間程度ながら、本学内外の施設見学、講演、研究室訪問、参加者本人の発表等、盛りだくさんであった。そしてその合間を縫って、参加者らは、大阪城見学や日本人学生との交流、チューター学生の案内によって、食事・観光・買い物までめいっぱい楽しみ、全員が元気にプログラムを終了して帰国した。



*Tomoyuki TERAI

1972年11月生
大阪大学大学院工学研究科 マテリアル科学専攻博士課程修了(2001年)
現在、大阪大学大学院工学研究科 マテリアル生産科学専攻 講師
(兼任)国際交流推進センター 講師
博士(工学) 材料物性学

2. プログラム行程

以下、当プログラムについて、参加者と本学教職員や学生との交流に注目して紹介する。

9月8日 関西国際空港着。学生チューターがピックアップ後、ホテルチェックインまで案内。ホテル



**Ikuko NOJIRI

1971年12月生
京都産業大学経済学部経済学科卒業(1994年)
現在、大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター CAREN事務局特任事務職員 学士(経済学)
TEL: 06-6879-4122
FAX: 06-6879-8973
E-mail: nojiri@fsao.eng.osaka-u.ac.jp



****Kiyoshi FUJI-TA

1964年9月生
神戸大学大学院自然科学研究科地球環境専攻博士課程修了(1994年)
現在、大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター 教授
博士(理学) 地球物理学
TEL: 06-6879-8972
FAX: 06-6879-8973
E-mail: fujita@fsao.eng.osaka-u.ac.jp



***Reiko TANAKA

1972年生
名古屋外国語大学外国語学部中国語学科卒業(1995年)
現在、さくらサイエンスプログラム(2014年9月7-18日)でコーディネーター担当 学士(中国語)



*****Toshihiro TANAKA

1957年4月生
大阪大学大学院工学研究科冶金工学専攻博士後期課程修了(1985年)
現在、大阪大学大学院工学研究科 マテリアル生産科学専攻 教授 工学博士
界面制御工学・材料物理化学
TEL: 06-6879-7504
FAX: 06-6879-7504
E-mail: tanaka@mat.eng.osaka-u.ac.jp

近隣の食品スーパーを案内、買い物の手伝い。参加者にはムスリム学生が数名おり、特に食事内容について丁寧に案内できたことが彼らの安心感につながった。チェックイン後、部屋の設備、礼拝に必要な方角の確認等のサポートを行なった。

9月9日 オリエンテーション後、理工学部図書館の見学、学食で昼食。この頃、参加者らはすでに打ち解けた雰囲気となり、冗談を言い合ったり、食事風景の写真を撮って早速SNSに投稿したりと賑やかなひとときであった。

午後は、大阪大学の概要および研究紹介を受けた後、早速参加者の興味関心に基づき、豊中・吹田キャンパスに分かれて研究室訪問をした。熱心な指導者と触れることができたため、参加者らのモチベーションが高まり興奮さめやらぬ様子であった。

9月10日 英語コースの説明・入試案内：

Quantum Engineering Design Course (量子エンジニアリングデザイン研究特別プログラム)、International Program of Maritime and Urban Engineering (海洋・都市基盤工学グローバルリーダー育成特別プログラム)、Chemical Science Program (Chemical Science 特別コース)、International Physics Course (国際物理特別コース)、Information Technology Special Course in English (インフォメーションテクノロジー英語特別プログラム)

本学研究施設見学：船舶海洋実験水槽、超高压電子顕微鏡センター

9月11日 バスツアー：大阪城、独立行政法人理化学研究所スーパーコンピューター「京」

9月12日 バスツアー：新日鐵住金株式会社製鋼所(大阪市)、大型放射光施設 Spring-8 (兵庫県佐用郡)

9月13日 本学留学生による“大阪大学留学の魅力について”の講演と質疑応答。

本学在籍中の留学生(インド、ベトナム、インドネシア出身)が、自身の留学生活・研究生活について講演を行った。日本の紹介に始まり、「Did you know?」という切り口で、多岐にわたるカルチャーショックについて紹介した学生。また、ある学生は、研究上大変な回り道をしてしまった経験を赤裸々に、しかし笑いをとる絶妙なプレゼンテーションで紹介。参加者の質問や感想から、留学生活についての重要なヒントを得たことが伺えた。

昼食時、学内レストラン「ラ・シェーナ」にて、CARENプロジェクトメンバー教職員、本学学生と共に懇親会。参加者は同国出身の留学生を質問攻めにしていた。さらに、本学の国際交流団体AIC主催の交流パーティーが行なわれた。色々な専攻の学生の交流にぴったりの自己紹介ゲームに始まり、笑いの絶えない賑やかなひとときであった。

9月14日 大阪市内見学(適塾跡、グランフロント大阪、梅田スカイビル)

グランフロント大阪では、屋上庭園より外国人観光客に大人気の梅田スカイビル、JR大阪駅北の梅田操車場跡、梅田周辺のビル群を見学後、「企業や大学のエキサイティングな技術や活動」を展示したナレッジキャピタルで各種展示物に触れた。メガネをかけずに見られる3D映像、実際の表情と違う表情が映し出される鏡、テレビや電話等の情報機器において過去-現在-未来を対比させた展示が特に人気であった。

適塾跡では、参加者らは、適塾で学ばれていた西洋医学や種痘事業について、さらに古い日本建築に大変興味を示した。自国の予防接種事業や、江戸時



写真1 (左)：懇親会 (CARENプロジェクトメンバー教職員、一般学生)
写真2 (右)：本学国際交流団体AIC主催の学生による交流パーティー

代に外国語で医学を学んだ塾生の大変さについて想像し、語りあっていた。

9月15日 終日フリーとし、各自プレゼンテーション準備等。

9月16日 参加者によるプレゼンテーション。参加者がプログラム参加によって得たことや抱負等を発表。会場は熱気に包まれ、参加者はもとより、運営側の我々も大変感動し、参加者・日本人学生共思わず涙ぐむ者もいた。発表内容は主に、自身の大学紹介や研究紹介、プログラムに参加できたことの感動、施設見学で感心したこと、今後のプラン、参加者仲間やチューターとの楽しい思い出であった。

大変印象的だったのは、複数の参加者が、自国の教育レベルを上げるために、教育制度をどうすべきか、自分には何かできるかを熱を込めて語ったことである。参加者らは自国の未来を背負っているという強い自覚を持ち、我々もその志に触れて身の引き締まる思いであった。

午後はプログラムの修了式を開催、参加者ひとりひとりに修了証が手渡され、学生チューターからも記念品が贈られた。

9月17日 ホテルチェックアウト後、チューターと共に関西国際空港へ。18日にかけて全員帰国。



写真3：9月16日修了式後、記念品として、チューター学生による書道の「絆」と集合写真が贈られる

3. 参加者の感想・コメント

参加者には個別にレポートを提出させた。そこには、学内外研究施設・企業の見学において最先端の科学技術を見学したことへの感動、研究者や本学留学生から直接話を聞いたことで得た情報やモチベーションの向上、交通機関の利用や大阪市中心部での見学を通して実感した秩序・清潔さへの驚き、多国の学生と知り合えた喜び、日本人学生チューターと過ごしたプログラム内外の楽しい時間が熱く語られ

ていた。

4. プログラムを振り返り、今後に向けて

本プログラムは、運営準備期間が非常に短く、どの段取りもタイトであった。しかし、幸い参加者10名と小人数であったため、急な見学先の追加等、機動的な対応で調整することができた。参加者からは、「もう少し長期間日本の大学で過ごしたかった」、「ぜひ本学の学生・研究者として日本に戻って来たい」、という声が多く寄せられた。

今回のプログラムで好評だった点、改善すべき点を踏まえて、同様のプログラムを継続していき、ひとりでも多くの優秀な留学生を獲得するきっかけとしたい。

また、このような交流プログラムは、当事者にとどまらず、本学の学生にとっても、外国人学生・研究者との交流に目を向けさせる貴重なチャンスとなっている。日本人学生も、熱心且つ楽しそうに参加者達のサポートを行っていた。学内でこのような機会があると、必然的に多くの学生を巻き込み、異文化を背景に持つ人々の存在や彼らとの共存が当たり前と感じられる学生が増えるだろう。こうして、研究者としても社会人としても柔軟性に富んだ魅力的な人材が巣立つことを期待したい。

5. おわりに

この活動は、JSTの平成26年度日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）の支援を受けて実施しました。

このような素晴らしい感動をもたらしたプログラム実行の機会を与えて下さったJSTに、そしてご多用中にお時間を割いてご協力下さいましたCAREN教員の皆様に深く感謝しております。



写真4：参加者のプレゼンテーション終了後の記念撮影